

安養の尼上の小袖

横川の恵心僧都の妹、安養の尼上のもとに強盗入りて、あるほどの物具、みな取りて出でければ、尼上は紙衾といふものばかり、ひき着てゐられたりけるに、姉尼のもとに小尼上とてありけるが、走り参りて見れば、小袖を一つ落したりけるを、「これを落として侍るなり。奉れ。」とて持て来たりければ、「それを取りてのちは、わが物とこそ思ひつらめ。主の心ゆかぬ物をば、いかが着るべき。いまだ、よも遠くはよも行かじ。とくとく持ておはして、取らせ給へ。」とありければ、門戸のかたへ走り出でて、「やや。」と呼び返して、「これを落とされにけり。たしかに奉らむ。」と言ひければ、盗人ども立ち止まりて、しばし案じたる気色にて、「悪しく参りにけり。」とて、取りける物どもを、さながら返し置きて帰りにけり。

【口語訳】

横川の恵心僧都の妹（である）、安養の尼上のところに強盗が入って、そこにある道具を、すべて奪って出て行ったので、尼上は紙衾というものだけ、引っ掛けて着て座っていらっしやったところ、姉である尼上のもとに小尼上といつていた（妹の）尼が、走り参上して見ると、（盗人が）小袖を一枚落としていたのを（拾って）、「これを（盗人が）落としております。お召してください。」と言って、持って来たところ、（尼上が）「それを奪ってから後は、（盗人は）自分の物ときっと思ってるだろう。持ち主が納得いかない物を、どうして着ることができようか、いや、着られはしない。（盗人は）まだ、よもや遠くへは行ってないだろう。早く早く持っていらっしやって、（盗人にこの小袖を）取らせなさいませ。」と言ったので、（小尼上は）出入口のほうへ走り出て、「ちよっと。」と（盗人を）呼び戻して、「これを落とさなされたよ。たしかに差し上げましょう。」と言ったので、盗人たちは立ち止まって、しばらく思案している様子で、「悪い所に参上してしまったなあ。」と言って、奪った品々を、残らずすべて返し置いて帰っていったということだ。